

# 東京初の



# “地域創生学部”の学びの中心は フィールドワーク——大正大学

既に50以上の地方自治体や団体と連携し、8週間、地方に住んで実習を行う。地域理解を深め、理論と行動の統合によって地域活性化のリーダーを育成していく。どのような教育内容なのか探った。

インタビュー 安田賢治（大学通信）

日本のグローバル化が進む一方で、大きな問題になってきているのが地方の再生だ。少子高齢化や人口減少、都市部への人口集中などによって、地方の衰退が目立つようになり、この再生が国家的な問題になってきている。国も地方創生大臣を置き、ようやく力を入れ始めたところだ。そうなるべくと、地方創生を担う人材育成が急務になってくる。そのため、大学が果たす役割は大きく、地方国立大学を中心に、今年、数多くの地方創生の人材育成を行う学部が新設された。

地方に、今年から学生は実習に行っています。現在、50ぐらいの地方自治体と連携しています。宮崎県の延岡市、徳島県の阿南市、宮城県の南三陸町などで学生は実習しています。受け入れ先の地方自治体で、最初に首長を訪問するんです。普通は会えませんが、それだけで学生は刺激を受けます。実習先に山形県長井市がありますが、わずか2カ月弱の滞在ですが、非常勤職員を命ずるといふ辞令をもらって、学生は感激したようです。地域とのつながりが深まれば、学生も自然と学びに力が入る。具体的に何を学ぶのか、柏木学監がこう説明する。

「地方自治体は地方創生戦略というものを作っており、それをどのように実行するのか、どういふビジョンなのか、それに教員と学生が参加させていたかどうかということなんです。役所の隣接領域になりますから、観光協会とか商工会議所とかに、お世話になりながら町づくりのお手伝いをするようになります。学生は学んだことを踏まえ、実習の最後に地域の皆さんの前で、プレゼンします。これもいい経験になると思っています」

まだ広く知られてはいないが、地域資源になり得る素材を自分の目で発見していくということだ。その土地ならではの地域資源を発見し、観光にビジネスに生かしていくという狙いだ。

## フィールドワークを中心に据えた学び

日本のいたるところに、まだまだ知られていない名産や地域

資源がたくさんある。今まで知られていなかったものを見つけ、どうプロモーションするかまでを考えていく。2年生の第3クォーターには、首都圏で実習を行う。その狙いについて、柏木学監は「大学に戻ってきて、本当に自分たちが1年生の時にフィールドワークで見つけた資源、あるいは資源を結合するというようなことが、東京の人たちにも理解できるの



大学通信 常務取締役  
安田賢治



大正大学 地域創生学部  
柏木正博 学監

## 首都圏初の 地域創生学部の誕生

大正大学は全国で21番目に設置された大学だ。今年で90周年を迎える。大乗仏教思想である「智慧と慈悲の実践」を建学の

精神とし、有意な人材を社会に送り出してきた。その伝統ある大学に今年、新設されたのが地域創生学部だ。

ただ、東京にある大学で地方といってもピンと来ないかもしれない。地域創生学部設置の大きな目的は、さまざまな地域から学生を受け入れ、東京で学ばせ、地域に回帰させることにある。

その中で、唯一東京にある大正大学で、地域創生学部地域創生学部を設置したのが大正大学だ。政府の期待も大きい中で、今春、スタートした。

なかでも注目されるのが、「地域における実践・実習」だろう。クォーター制を採用しているが、第3クォーターで8週間の地域実習を行う。学生はすでに地域実習に出発している。8週間、地方に住み、地域の活性化について教員と共に学ぶことになる。大正大学地域創生学部の柏木正博学監がこう話す。

「受け入れていただける多くの領域における実践・実習」だろう。クォーター制を採用しているが、第3クォーターで8週間の地域実習を行う。学生はすでに地域実習に出発している。8週間、地方に住み、地域の活性化について教員と共に学ぶことになる。大正大学地域創生学部の柏木正博学監がこう話す。

か、あるいはマーケティングが反応を示すかということを検証します。自分たちがプロモーションをして、3年生でまた1年生で行ったのと同じ所へ実習に行きます。もっと深掘りをしてもらうためです。そこで卒業研究を行い、そのまま1割でも2割でも、学生がそこに住んで、できれば役所に公務員として就職してもらおうのが理想です」といふ。3年生が実習に出かける時には、1年生と一緒にということになる。異年齢との交流も大切なことだ。どのような学生に来てほしいかについて、柏木学監に聞いた。

「問題意識を持っている学生に来てほしいですね。このままでは人口減少でどうなるのだろうか、あるいは都市と地方との格差や環境の違い、そういうもの

に興味を持っているなど、問題意識の高い学生に来てもらえればと思います。ただ、逆に見る学生でもかまわないと思います。入学してから伸びて、問題意識を持つようになればいいと思いますし、異なる考え方の学生がいることで、教育効果は高まる面もあります。とにかく、何かに関心を持っている学生が一番いいと思っています」

授業もクォーター制のため、週2回同じ科目の授業が行われる。アクティブラーニングを取り入れた授業が多いのも特徴だ。地域創生の人材は、地方出身者でないとできないわけではない。首都圏の高校生も、地方で活躍するきっかけがこの学部にある。地域活性化のリーダー育成は、まだ始まったばかりだ。



(上) 地域創生学部の学生が学ぶ、ラーニングcommons。  
(下) 佐渡での実習の様子。